中高年看護師の職業性ストレス・職務満足度・バーンアウトとの関連

看護管理室
中村 美保

【目的】

中高年看護師（35～40歳、41～50歳）の職業性ストレスが、職務満足度とバーンアウトに及ぼす影響を明らかにする。また、中高年看護師の職業性ストレス、職務満足度、バーンアウトの特徴を明らかにする。

【方法】

Ａ県内３施設総合病院に勤務している35～50歳までのスタッフナース133名を対象とし、平成17年８月９日～10月21日まで調査を実施した。集計結果はSPSS（Ver. 11. 5）にて重回帰分析、平均値の差の検定を行った。

【倫理的配慮】

各施設の看護部長に研究依頼書を提示し、研究の目的・使用する質問紙の説明等を行い、中高年看護師（35歳～50歳のスタッフナース）を対象に質問紙の配布を一任した。研究協力者に配布した依頼書には、依頼研究の趣旨参加や中断いついては自由意志であり、それによって何ら不利益を蒙ることはないこと。調査結果は統計的に処理し研究者以外で取り扱うことはないため、個人の回答が公にされることはなく厳重に保管することを文章にて伝え、自己式無記名質問紙と郵送法での回収とした。

【成績】

職業性ストレスの各因子得点の結果、35～40歳は仕事の困難さ、41～50歳は働きがいの欠如をストレスと感じている。重回帰分析では、中高年看護師は職業性ストレス、職務満足度、バーンアウトとの関連があると検証された。平均値の差の検定では35～40歳は職業性ストレスが高く職務満足度は低いが、41～50歳は職業性ストレス、職務満足度は高いという結果であり、仕事に対しストレスを感じながらも、仕事に満足している傾向であるといえる。バーンアウトスコアに関しては、平均3. 77にてバーンアウトの徴候が見られた。

【結論】

35～40歳では、職業性ストレスが高く職務満足度が低いという結果であり、看護の仕事にやりがいや誇りがもてず、自分の能力が十分発揮できていないと考えられ、看護ケアに意欲がもてないと推測される。41～50歳では職業性ストレス、職務満足度共に高くなっており、この年代の看護師は今までの知識・経験によるストレスの対処方法を身につけており、看護職がストレスと感じながらも看護職に満足しているという特徴がみられる。

本研究で職業性ストレスの中の、「仕事の困難さ」「働きがいの欠如」が見られているため、今後中高年看護師を戦力として活かしていくためには、現場で求める役割を明確に示し、中高年看護師の特徴や個人の特徴、力量を把握したうえでの役割を与えたり委譲したりすることで、本来の中高年看護師の能力が発揮できるのではないかと考える。

（平成19年８月24・25日　第11回日本看護管理学会年次大会（高知）にて発表）